

様々な震災復興支援を受けて

県庁築高同窓会 会長 菅原 久吉

(築高 48 年、高 25 回卒)

あの東日本大震災発生から半月後の平成 23 年 4 月 1 日、東北新幹線不通の中、高速バスで宮城県東京事務所に赴任しました。赴任早々、宮城県の窓口として市民、企業、団体等からの問い合わせや復興支援等への対応、そして政府や国会への震災関連の予算要望等めまぐるしい日々の連続でした。

様々な復興支援がある中、海外からの支援はおのずとその国の特徴が出ます。クエート政府からは 500 万バレルの原油（約 400 億円相当）を岩手、宮城、福島 の 3 県へ無償提供、その贈呈式に知事代理として出席。カナダ政府によるカナダ木材を使った名取市閑上朝市の再建支援など、東京事務所窓口だけでも相当数の国から支援を受けましたが、今回の震災を通してできた支援国との絆は、今後に繋げていきたいものです。

海外だけでなく国内からも多くの支援を頂きました。若者を中心とした被災地へのボランティア支援。池袋にある宮城県物産館は被災で品不足にもかかわらず、売り上げ額は震災前の 3 倍。企業団体等が主催する各種イベント等では宮城物産販売コーナーを設置して頂くなど、老若男女問わず日本人に内在する共助の精神を改めて実感しました。

「今年の支部総会を仙台で開催したいのでホテルを紹介してほしい。」という相談をある工業界の関東支部長から受けたことがありました。会議と懇親会だけの総会ではもったいないと思い、被災地視察コース（地元語り部付き）を提案したところ、大好評で全国の支部へ声がけして頂いたほどでした。詳しく聞いてみると「被災地に行ってみたいが、復興の邪魔になるのではないか。物見遊山と思われるのではないか、と躊躇している企業団体が大勢いる。」ということが分かりました。早速、被災市町の協力のもと被災地視察コースのチラシを増刷し周知したところ、非常に多くの企業団体に被災地に足を運んでもらい、宿泊、買い物等を通じた復興支援に協力して頂きました。視察した企業の社長さんから「大変勉強になりました。会社の防災訓練の一環として視察先でお世話になった語り部の方に講師をお願いし、全社員に聞かせました。」と報告を受けた時は感無量でした。

平成 25 年 4 月、人事異動で 2 年ぶりに仙台に戻りました。今年度は 10 年間の宮城県震災復興計画の 3 年目で、我々県庁築高同窓生（約 300 名）も築高で培った粘りとフットワークを生かしながら、それぞれの職場、立場で早期の復旧復興に向け日々奮闘しています。